

第 2 部

高校生と大学生のワークショップ

【ファシリテーター】

高須 佳奈（島根大学地域未来戦略センター 講師） A会場

中野 洋平（島根大学地域未来戦略センター 講師） B会場

【参加者】

島根大学学生

島根県及び鳥取県の高校生

トークセッション

【ファシリテーター】

今村 久美（認定特定非営利活動法人 カタリバ 代表理事）

【パネリスト】

小山 竜司（神奈川大学 理事長付特別審議役、
前まち・ひと・しごと創生本部事務局参事官）

岩本 悠（島根大学地域教育魅力化センター 地域教育アドバイザー、
島根県教育庁 教育魅力化特命官）

※「トークセッション」は雲南市が主催したプログラムで、本学が主催した「高校生と大学生のワークショップ」と同時に並行して実施されたものです。

高校生と大学生のワークショップ

(1) ワークショップの趣旨

高校生と大学生で構成する5～6人のグループに分かれ、与えられた地域の課題事例についてチームとして解決策を検討することを通して、地域社会の課題について考え、他者との対話を通じて、自分の未来（社会とつながって自分はこれからどうなっていきたいか、また、そうなるためにどのような力をつけたいのか）について、考える機会としました。

(2) ファシリテーター

地域未来戦略センター 高須 佳奈 講師
地域未来戦略センター 中野 洋平 講師

(3) 参加者

高校生62名（島根県8校・鳥取県1校）
大学生29名（島根大学 1～4年生）
※合計91名が16のグループに分かれて活動しました。

(4) 会場

雲南市加茂保健福祉センター「かもてらす」
A会場；トレーニングルーム（1～8班）
B会場；大会議室（9～16班）

(5) ワークショップ（100分）の流れ

10：15～10：25 本日の活動について知る
10：25～10：45 各グループで自己紹介
10：45～10：50 課題（ミッション）を受け取る
10：50～11：20 課題解決策を検討する
11：20～11：35 課題解決策を発表する
11：35～11：45 自分の未来を考える
11：45～11：55 振り返り



10：15～10：25 本日の活動について知る



10：25～10：45 各グループで自己紹介



カードを使って自己アピールしました

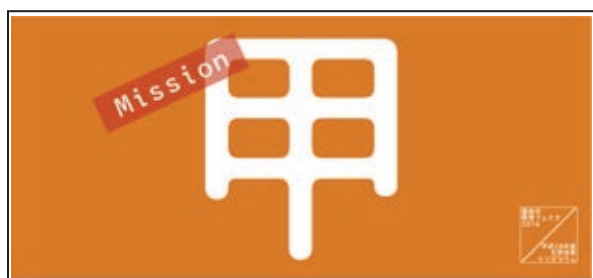


10：45～10：50 課題（ミッション）を受け取る



各グループに提示された課題

「甲」「乙」「丙」「丁」の4種類の地域の課題(ミッション)が用意され、グループの代表が引き当てたいずれかを各グループに持ち帰り、何ができるのか、アイデアを出し合いました。



指示があるまで開けないでください

Mission

**地域の行事に
若い人が参加しなくて
困った！**

の解決策を考えてください。

指示があるまで開けないでください

Mission

**車がないと買い物にも
病院にも行けなくて
困った！**

の解決策を考えてください。

地域の行事に若い人が参加しなくて困った！

私たちの地域には、神社のお祭りや地区運動会、地区内の掃除など色々な行事があります。昔は子供から大人まで大勢の人が行事に参加して、親睦を深めたり、地域をより良い環境にしたりしていました。ですが最近若者が参加せず、行事の維持が難しくなっています。このままでは地域の活力が失われてしまうのではないかと心配しています。多くの若者に地域の行事に参加してもらうにはどうしたらよいでしょうか。

雲南市民谷地区 ●●自治会 73歳 男性

© 2014 K.Tokumaki & T.Nakano CCS Shimane Univ.

車がないと買い物にも病院にも行けなくて困った！

私の住んでいる地域にはスーパーや病院がないので、買い物や病気のときには車で離れたところまで通っています。今年の夏に足に怪我をしてしまい、車の運転ができなくなりましたが、幸い夫や息子が運転してくれるので、不便ですが何とか生活できています。

でも近所には一人暮らしで車を持っておられない高齢者がたくさんいます。そういう方々はどうしたらよいのでしょうか。

雲南市波多地区 △△自治会 64歳 女性

© 2014 K.Tokumaki & T.Nakano CCS Shimane Univ.



指示があるまで開けないでください

Mission

空き家が
増えてきて困った！

の解決策を考えてください。

指示があるまで開けないでください

Mission

木次線の将来が
心配で困った！

の解決策を考えてください。

空き家が増えてきて困った！

私の家の隣は空き家です。ずっとおじいさんおばあさんが二人で住んでいましたが、去年、広島の子息さんと同居することになり引っ越しされました。それからは空き家のままです。近所をよくみると、空き家がたくさんあります。手入れがされていないのか、今にも崩れそうな家も。うちには小さな子供がいるので、危険な空き家が増えると心配です。空き家を減らすにはどうしたらよいでしょうか。

雲南市吉田地区 □自治会 35歳 女性

© 2014 K Takasumi & Nishimura CCL Initiative Inc.

木次線の将来が心配で困った！

雲南市を走る JR 木次線は今年開通 100 周年を迎える、雲南市民にとっては大切な鉄道です。ですが最近、利用者が減り元気がありません。

同じ島根県の JR 三江線は、利用者の減少から廃線が決まりました。このままでは、木次線も廃線になってしまうのではないかと心配です。木次線を盛り上げていくにはどうしたらよいでしょうか。

雲南市木次地区 ○自治会 42歳 男性

© 2014 K Takasumi & Nishimura CCL Initiative Inc.

10：50～11：20 課題解決策を検討



11：20～11：35 課題解決策を発表



課題解決のために各グループから 出てきたアイディア

- ・ SNSで地域の魅力を伝える。
- ・ 地域の行事に若者が参加したくなるような楽しいイベントにする。
- ・ 病院や店から、出張してもらう。
- ・ 移動販売を増やす。乗り合わせを推進。
- ・ 空き家を農家民宿にリフォームする。
- ・ 環境の良さを活かした合宿所を建てる。
- ・ 木次線の魅力を映画化して発信する。
- ・ 木次線の車内で楽しいイベントをする。
- ・ ここでしか買えない駅弁を開発する。

など

11:35～11:45 自分の未来を考える



アイディアを実現するだけでなく、課題解決の成果を上げるには、実地調査等に基づく客観的なデータの集積や、持続可能性を見通したビジョンの構築、住民・自治体・行政等との調整など、多くの段階を越えていかねばなりません。実際に数多くの取組がなされていますが、最適解としてすぐ課題解決に結びつくというものでもありません。試行錯誤を繰り返し、常によりよいあり方を考えることが大切になってきます。

地域の課題に向き合うには、地域への思いをもつだけでなく、自分の生き方と地域社会とのつながりを考え、自身の力量を高めていくことが必要となります。高校生と大学生は、ワークショップの最後の活動として、

- ・自分はこれからどうなっていきたいか。
- ・なりたい自分になるために、これから自分が取り組んでいきたいことは何か。

の2点（自分自身の未来）について考え、

ワークシートに書きこんで、これからの行動につなげることにしました。



自分の未来を考えるワークシート

11:45～11:55 振り返り

ワークショップのまとめとして、参観していただいた参加者の方から感想をいただいた後、ワークショップに参加した高校生と大学生は、アンケートに回答することを通して、本日の自分自身の活動について振り返りを行いました。

（6）ワークショップの成果

ワークショップに参加した高校生と大学生91名のアンケート結果を、次のページに掲載します。

高校での地域課題にかかわる学びと島根大学の地域志向教育をつなぐことを意図した100分間の活動を体験した高校生と大学生は、自分の考えを初対面の相手に伝えることや、互いの意見を活かしながら協働で解を見つけていくことの難しさを感じるとともに、高校生は大学生が身に付けている力に、大学生は高校生の態度や力量に、互いに刺激を受ける場面があったようです。

ともに未来を考える高校生と大学生のワークショップは、自分自身の未来と地域の未来に向かって、具体的にどのような行動をとっていききたいのかについて、考える機会となったようです。

平成28年度大学改革シンポジウム ワークショップ アンケート結果

平成28年10月16日(日)実施

		参加者数	回答者数
A会場	高校生	31	31
	大学生	15	15
	計	46	46
B会場	高校生	31	31
	大学生	14	14
	計	45	45
	高校生計	62	62
	大学生計	29	29
	総計(人)	91	91

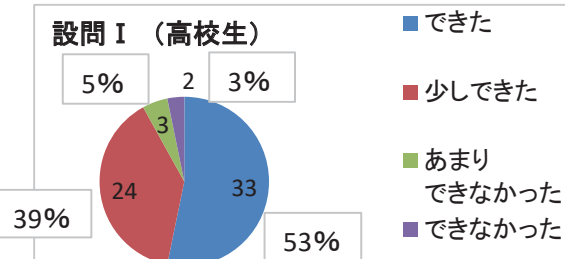
参加した高校生の出身高校

開星高校、島根県立飯南高校、
島根県立江津高校、島根県立大
東高校、島根県立松江東高校、
島根県立三刀屋高校、島根県立
横田高校、松徳学院高校、鳥取
県立鳥取中央育英高校
(五十音順)

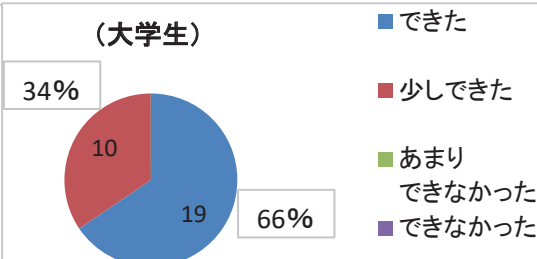
○ 設問Ⅰ. 今日の活動では、自分なりにアイディアを出したり、考えたりすることができましたか。

	できた	少しできた	あまり できなかった	できなかった
高校生	33	24	3	2
大学生	19	10	0	0
計	52	34	3	2

設問Ⅰ (高校生)



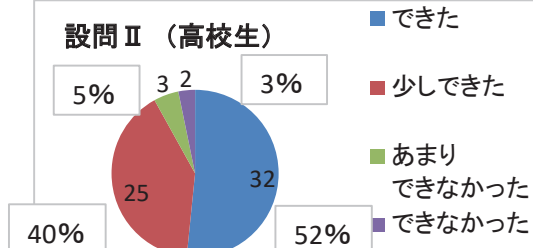
(大学生)



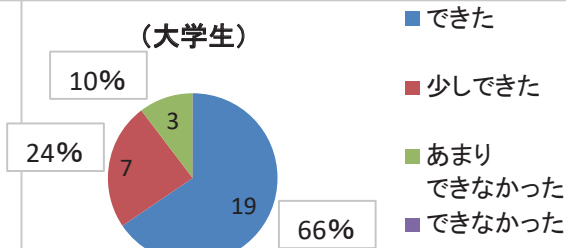
○ 設問Ⅱ. 今日の活動では、自分のアイディアや考えをチームのメンバーに伝えることができましたか。

	できた	少しできた	あまり できなかった	できなかった
高校生	32	25	3	2
大学生	19	7	3	0
計	51	32	6	2

設問Ⅱ (高校生)



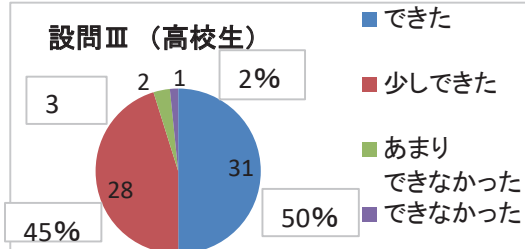
(大学生)



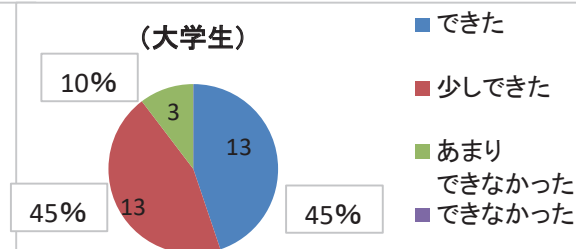
○ 設問Ⅲ. 今日の活動を通して、自分の未来を考えることができましたか。

	できた	少しできた	あまり できなかった	できなかった
高校生	31	28	2	1
大学生	13	13	3	0
計	44	41	5	1

設問Ⅲ (高校生)



(大学生)



()内の数字は内数

○設問Ⅳ. 今日の活動を通して、難しかったことがあれば、どのようなことだったか、書いてください。

- 高校生**
- ① 一つの課題に対して、様々な方向から解決方法を考えること。
グループのメンバーの意見を生かし、発展させること。(13)
 - ② 皆で出しあった意見は様々で、それらをまとめることが難しかったです。
またそれらを班の特徴・魅力と結びつけることの難しさも感じました。(10)
 - ③ 自分の意見をチームのメンバーにうまく伝えることが難しかった。(7)
 - ④ 初対面の人と話し合うというのはとても苦手で、大丈夫かなと思うところがありましたが、
楽しかったです。また、身近にある課題を自分達で解決していくことは難しいと感じました。(4)
 - ⑤ これからの自分を考えることが難しかったです。(2)
 - ⑥ 特になかったです。楽しかった(2)
 - ⑦ すべて難しい。
 - ⑧ 話し合うこと。
 - ⑨ 自分とはちがう考えをどう広げていくか。
 - ⑩ 自分が置かれた状況と異なる状況で生活している人の立場を客観的に見ること。
 - ⑪ 地域課題の解決が、いいのがあっても、実現可能なものなのか、
そこにも注目しないといけないのが大変だった。

- 大学生**
- ① メンバーの意見を尊重しつつ、どのように議論を広げるか。
それぞれの意見の共通点・つながりを見つけ新たな意見を創造すること。(7)
 - ② 年齢差や経験差のあるグループの中でワークショップということであり、
沈黙が生まれることもあり、会話や議論の展開の難しさを感じた。(7)
 - ③ 高校生の考えや意見を聞き出すこと、引き出すことがまだまだ十分にできませんでした。
時間がもっと欲しいですし、実際の課題を当事者にヒアリングできるともっと良かったです。(4)
 - ④ 課題が木次線についてであり、実際に木次線を利用したことがなかったので
少し難しかったです。(3)
 - ⑤ 自分の将来と、地域の課題を重ね合わせること。(2)
 - ⑥ 高校生と一緒に考えること、どこまで自分がしゃべっていいのか、
導くこととの限度を見極めて考えることが難しかった。
 - ⑦ 年下で、初対面の人と喋るのは難しかったが、良い経験となりました。
 - ⑧ ワークショップのゴール、どこまで求めているのか分からなかった。
課題の現状について、地元の高校生もよく分かっていないようだった点。
 - ⑨ 特になく、楽しく有意義に活動させていただきました。

○設問Ⅴ. 今日の活動を通して、何か新たに得たことがあれば、書いてください。

- 高校生**
- ① 地域の課題について考えたことがなかったの、今回参加して、考える事が出来たし、
他の人の意見も聞くことが出来て良かったし、楽しかったです。(28)
 - ② 自分が地域とかかわるなかでどんなふうになりたいかを考えることができ、
まだわからないけど、ちゃんと見つけたいとおもった。(7)
 - ③ 自分の中のフワフワしていた理想が少しはっきりした。
 - ④ 自分の目指している職が地域とどうつながるのか考え、少しだけ答えがでた。
 - ⑤ 自分の地域についてより考えるようになった。
 - ⑥ 視野を広げていかないといけないと感じた。
 - ⑦ まだ夢がないので、早く見つけます。
 - ⑧ 自分でも課題を解決できることが分かった。
 - ⑨ 1つの課題について考えると、その課題を解決するための課題がいくつもでることがわかりました。
 - ⑩ 雲南省のことをいろんな人が考えてくれているんだということが分かり、うれしかったです。
 - ⑪ 積極的に動くこと。大学生さんの進め方が勉強になりました。
 - ⑫ 大学生は問題の根本を見て解決しようとしていました。
この交流でもっと深い意見を出していけるようになったと思います。
 - ⑬ まとめ役がいるとスムーズに進む

- 大学生**
- ① 最近の高校生がしっかりといて、自分も負けてはいられないなと思いました。
また、自分には無いアイデアが聞けてとても良い時間を過ごすことができました。(5)
 - ② 高校生の意見がすごくしっかりといて納得できるものであり、
こういった若い力を活かせる島根を作りあげていけるそんな人材に将来なりたいたいと思いました。(3)
 - ③ 自分の考えを積極的に伝えて、他人の意見とつなげること。(2)
 - ④ 地域に対する問題解決の新たな考え方。(2)
 - ⑤ たくさんのアイデアをまとめることの大変さを知った。どんなアイデアでも、
口にしたらみんながサポートしてくれて、よりよいアイデアにしてくれることを知った。
 - ⑥ 高校生の意見・発想は非常に柔軟であり、議論をする中で刺激を受けることができた。
 - ⑦ 地元を他県の人から見たら足りない部分が見つかるということ。
 - ⑧ 漠然としたものではなく、具体的な案がたくさんで具体性をもつことの大切さを学びました。
 - ⑨ 雲南省の現状について。
 - ⑩ 将来何になりたいかだけでなく、何になってどう社会に貢献していきたいかを考えることができた。
 - ⑪ 年齢等に関係なくスムーズに会議を進める方法がもう少しあったのかなと思った。
 - ⑫ 自分の性格。ファシリテーションの難しさと楽しさ。

トークセッション

ファシリテーター 今村 久美 氏
パネリスト 小山 竜司 氏
パネリスト 岩本 悠 氏

○今村氏 NPO法人カタリバの今村と申します。いつも温泉地区にあります教育センターであります「温泉キャンパス」の運営と、土日のお休みの日を使ったキャリア教育活動であります「幸雲南塾」のほうをカタリバのチームで担当させていただいております。

本日は、今からの時間、お二人のゲストと一緒に進めていければと思いますので、まずゲストの二人の方に登場していただきたいと思います。どうぞ。

今、おいでいただきましたのは、神奈川大学理事長付特別審議役、すごい役割を担っていらっしゃいますが、小山さんは、神奈川大学から、今日はおいでになったんですよね。

○小山氏 ええ。おとしから神奈川大学に身を置かせてもらって、要すれば文部科学省の役人を平成元年に役所に入って25年、26年やらせてもらっています。

○今村氏 ありがとうございます。

そして、島根県教育庁教育魅力化特命官ということで、特命官ってまたすごいですけれども、岩本悠さんにも前に来ていただきます。

○岩本氏 私、東京出身なんですけども、10年前から島根県のほうでずっとお世話になってます。特に教育、10年前からは高校のほうで高校の魅力化ということで、隠岐島前のほうでさせていただいていました。今は、県の教育委員会のほうでそういった取り組みを支援していくような仕事をさせていただいています。今日は、どうぞよろしくをお願いします。

○今村氏 よろしくをお願いします。今からの、皆さんにこの時間をどう過ごしていた

だくのかというところなんですけれども、もしかしたらすごくご心配されてる方もいらっしゃるんじゃないかなと思うんですが、このお配りいただいているこちらの資料。資料の中のページを開くと、中に、11時から「熟議」と書いてありますね。そして、先生方には既にどこのお部屋にこの後行っていたのかということのご案内もあるかと思うんですけれども。

ここから先生方には、また、ご参加いただいている親御さんの皆さん、そして地域の皆さんには、それぞれグループを組んでいただいて「熟議」をしていただきます。

「熟議」とは何でしょうか。何となく「熟議」と言われるものに参加したことがあるよという方、どれぐらいいらっしゃるのでしょうか。もしかしたら、昨年、教育フェスタに御参加の方は参加いただいたかと思うんですけれども、小山さん、「熟議」っていうのは、数年前に突然、教育業界に少しずつ入ってきたキーワードになってると思うんですけど。

○小山氏 そうですね。5、6年前だったですかね。

○今村氏 これはどういうものとして始まったんですしたっけ。

○小山氏 やっぱ、みんなで議論しようよっていうことに尽きるわけですけど、それまでの上意下達っていうんですかね、文部省で方針を決めてだんだんお伝えする、県に伝え、県が市町村に伝え、学校現場に伝え、先生方に聞いてもらう。趣旨徹底講習会なんていう言い方を伝統的にしてたんですけど、方針は上で決めるもんだと。役所でも思い込んでいたかもしれない、先生方も思い込んでいたかもしれない、でも、そうじゃないんだよ、みんなで議論して決めていこうよっていう着想が、この「熟議」っていう言葉に込められてるんじゃないかなと思って、最近やってきましたよね。

○今村氏 文部科学省として、全国の先生方がもっと「熟議」をする風土をつくって

いこうよ、全国の地域の方々がもっと教育ってどうあるべきなのか、保護者の方々が学校とともにどういうふうに子どもたちを育てていくのかということを、もっと話し合う風土をつくろうということで、数年前から文科省の方々が旗振り役になって、全国各地で始められたという理解でよろしいでしょうか。

○小山氏 そうですね。私なんか、おじさんたちはそういうのなかなか苦手だったりするんだけど、役所の中でも若手なんかは、このやり方に飛びついて自分たちも参加したり、いろんなとこに出向いていってファシリテートもしたりとか、いろんな活動をしてるみたいですね。

○今村氏 この教育フェスタでも、教育委員会が何をを目指しているのかとか、雲南市がこれまでどんな教育を担ってきたのかということを知っていただくのではなくて、先生方にお話し合いをしていただくということで、この「熟議」を11時から開催することにいたしました。何をそもそも「熟議」するのということなんですけれど。

11時から、先生方には、簡単に言うとこれからの社会で子どもたちのどんな力を身につけていけばいいんだろうということが一つ目。二つ目は、それをどういうふうに育んでいこうかという、どんな先生方、親御さんの皆さん、地域の方々のどんな行動がその子どもたちを育む作戦になるだろうかということの二つを、この後、話し合いをしていただきます。これが11時からやる「熟議」の時間です。それでいきなり話し合ってくださいといってもなかなかお困りになると思いますんで、きょうはお二人に、話し合いの土台になる、前提になるヒントをここで提示していただく時間を、このトークセッションの時間に設けたいと思います。そんなお願いをお二人にさせていただきます。

では、小山さんから、皆さん、先生方がお話しになる何かヒントになるようなお話

を、少し最初にいただこうと思います。では、よろしくお願いいたします。

○小山氏 じゃ、最初に、ちょっとデータをご紹介させていただきます。これは、今、学校のカリキュラム、教育課程、それを今後どうやっていくかって文部科学省でも中央教育審議会とかで大議論になっていて、これからの時代どう変わっていくのか、教育はどう変えなきゃいけないのかっていうときに、枕言葉というか、必ず引用されるデータというか、話ですね。もう子どもたちの3分の2ぐらいは、大学出たころには今は存在してない職業につくはずだと、今考えてもどんな職業ができてかわからない。

それから、二つ目で、半分近い仕事は、今後たった10年から20年で、大半が自動化されてしまう可能性がある。だから、ビジネス雑誌なんか本屋でちょっと見ても、何かなくなる職業、生き残る職業みたいな特集も組まれたりしているけども、それぐらい不透明な時代に今差ししかかっている中で、子どもたちに何を教えたらいいか、何を考えさせたらいいか。だから、最初のテーマでも自立とか行動とかいうキーワードはそこから出てくるんだと思うんですね。

あと、三つ目に、ジョン・メイナード・ケインズって、大経済学者のケインズで、ちょっと時代的にも古いですが、要するにこれ1930年でしたかね、その前の年に世界大恐慌があって、経済が世界的に落ち込んでどうするんだっていうときに、いやいや、みんなよく考えてみようと。今、苦しいけれども、例えば100年たったら、2030年どうなってるかっていったら、一つのケインズの想像として、仕事の時間は相当減っても大丈夫なんだ、だから大変じゃなくて、失業するとかそういう意味じゃなくて、いかにこれを豊かな生活に切りかえていくチャンスとして前向きに考えようじゃないかって、当時、1930年だったと思いますけど、

論文で言っていた話だそうですね。その予言が本当に今、実現しつつあるのかもしれませんが。

もう一つ、人口です。ここ雲南に来て、私なぞが言うまでもないことですが、19世紀末から22世紀まで、ドラえもんの時代まで帯をとってあって、人口減っていくんだと、減り方尋常じゃないんだと。22世紀の始めには、ほっといたら4,000万人台に落ち込みます。今、1億2,800何万とかいって、もうピークアウトはして、ちょっと減り出したって報道に出てたのもご存じかと思うんですけど、坂を転げ落ちるように人口が減っていく。安倍内閣でも、2060年ごろに8,674万人って予測を出してますけど、これを何とか1億人ぐらいで下げ止めるにはどうしたらいいか、少子化を止められるかどうか、大議論をしているという状況ですね。これは基礎的なデータとして、もう未曾有の人口減になって、おのずと社会は変わらざるを得ない。「地方消滅」とかいう本が出てショックを呼びましたけども、いや、地方消滅だけじゃない、東京だって消滅するかもしれない。消滅消滅って言うても始まらない。自分たちの地域をどうやってつくり上げていくか、残していくか、次代に伝えていくか、大人たちが考えなきゃいけない時代ですよというわけですね。私、文部科学省で仕事してましたし、内閣官房で安倍内閣の地方創生の仕事もさせていだいてたりしましたがけれども、要すれば、国でそういう緊急課題だ、職員集めて何するかといったら、地方の先進事例をできるだけ集めろという話になるわけです。来週の会議に、官邸の会議にかけるから、今日明日で集めろとか無茶な話言われて、だから地方に出て出歩いている時間なんか当時なかったんですけども、夜を日に継いで地方の先進事例、おもしろい取り組み事例を必死に探すということをやっていました。それぐらい、国で方針決めて流せば地方は生き残りを図れるなんてことはないことに皆が

気がついた。

それから、教育の場面でも、こういう世の中ですから、ずっと大人たちがやってきたような受験競争、カリキュラム、詰め込みや、いじめ・不登校対策、もう皆さんご努力いただいて今日があるのですが、これからの不透明さ、これだけ増してますんでどうしようと。今までと同じことを子どもたちに教えていたら、子どもたちが大人になって困るかもしれない。さあ、どうするってしたときに、もう国には答えは、申しわけありません、ないんだと。東京にいて、うんうん頭ひねっても、考えても出てこない。答えは地域ごとにカスタマイズされた形で皆さんが試行錯誤してもらうしかない、答えは一様ではない。

これぐらいと思いますけど、今日、島根大学とも共催ということなんで、大学のこともちょっと一言だけ言わせてもらって、先ほど来、学長もご挨拶され、「COC」っていう言葉ありましたね、学生さんの発表に。「センター・オブ・コミュニティ」っていう略語で、文科省が予算事業で造語してる話なんですけども、大学もそういう中でどうやって地域の役に立っていくか。全部が全部、国立大学だからといって東大、京大のまねをしていい時代ではとてもない。島根大学は島根大学のあり方で、地域に頼られる大学に変わってほしい。どんどん地域社会、地元と交流をしてほしい。そういう動きの中で積極的に取り組まれてるんで、この教育フェスタも大学改革シンポジウムと一緒になってる。皆で、大学のリソースも、大学生も入ってもらって、もちろん地元の高校生の立派な発表ありましたね。みんなで考えていこうじゃないか、統一的な答えはないはずだ、さあ「熟議」してもらいたいという催しなんじゃないかなと思って、ちょっとこのデータをご紹介します。すみません、答えはないんだというのを、私は白状しに来たというのが正直なところですね。

○今村氏 ありがとうございます。

では、続きまして、この流れのまま岩本さんによるヒントを提示していただきたいと思います。

○岩本氏 岩本です。よろしくお願いします。この後の「熟議」していくためのヒントということで、話をちょっとだけ紹介させていただきます。

先ほど小山さんのほうから、国の話や社会全体の人口の話ありました。次は、ちょっと地域の視点でというのを少し考えてみるとどうかというので、雲南市さんの中学校を卒業する生徒数のシミュレーションなんかを見てみても、次の15年で約4割減るということで、もう22世紀とかの話でなく、15年後には約6割ぐらいの子どもの数に、普通にいくとなっていくということを見たときに、やっぱりもう学校の形も教育のあり方なんかも、場合によったら変わっていきなさいいけない部分もあるかもしれない、そういう変化がもうすぐ差し迫っているというような現実があるというところかなと思います。そうした現実をちゃんと直視しながらも、今、そしてこれからどうしていくのかということは、さまざまな地域で議論されているところです。

最近言われている地方創生というような言葉なんかもありますけども、本気でこの地域の20年後や30年後、40年後を考えたとき、どんな取り組みが必要になってくるのかというのを考えていくと、今はどちらかというと、もう本当に子どもの数、人の数が減っていく中で、何とか地方に、人に来てもらおう、もしくは仕事をとってこよう、何かの本社が来てくれたらいいとか、企業誘致しようとか、お金持ってこようとか、そういう何か中央から何かを持ってこようと、そういった流れなんかも当然ありますし、これはこれで非常に重要なことだと思います。東京の一極集中を何とか是正しな

がら、地方に元気をということやってますが、恐らく、これだけでは長くは続かないということが、人口の推移なんかを見ても見えていいます。そうしたときに、短期的にはこういった取り組みをしながらも、長期的に必要なになってくるのは、地方に何かを持ってこようという発想だけでなく、この地域でみずから次の地域をつかっていける、そういう人を育てていくということが非常に重要になってくるということです。

雲南市は、短期的なところも当然やりながらも、市長さんの話でもありましたが、中長期的に絶対重要になってくる、必要になってくる、この人づくり、地域でみずから自立していけるような人、次の世代をしっかり育てていこうということにも市を挙げて取り組もうとされているというところ、何か非常に先を行ってるなというような印象を受けているところです。

そのときに、地域で自立する子ども、若者たちを育てていこうというときの議論の一つの観点としては、やはり縦と横の連携というのがよく言われているかと思います。縦として、幼保小中高と、雲南市さん、すごいと思うのは、今回大学なんかも入れて、それでしっかり縦でつないでいこうと、こういう縦の連携ですね。そして、横、学校だけでなく、地域のさまざまな団体とか含めて、学校と地域協働して一緒にやっていこうと、こういう発想で育てていこうということです。

そのときに、縦でつないでいく、地域総がかりの教育というのを考えたときに、発達段階に応じて、ちょっとずつ教育の観点が変わっていく部分もある。よく言われていますが、「in」「about」「for」「with」（イン、アバウト、フォー、ウィズ）という段階ですね。例えば小学校の低学年なんかは「in」。地域の中でどっぷり浸る自然体験とか文化体験とか、もう五感にしみ入るような、理屈でなく、神楽の音だとか、

食育なんかもそうですね。そういう地域の文化、風土にどっぷり浸るような体験を学校、家庭、地域でしっかり子どもたちに体験させてあげるといような部分。次、

「about」。地域について調べる、考える、もしくは何か発表するとか、伝えていこうとする、そういう活動だとか、教育活動。小学校高学年とか中学校ぐらいになると、さらにそれに加えて、「for」。地域のために行動する、実践する、貢献する、そういう活動をやっていく。先ほどの高校生の話なんかもありました、地域のために動いた結果、少しでも何か変わる、その中で、あっ、自分たちで自分たちの地域や社会を少しでも変えていけるんじゃないか、そういう感覚を持っていく。そして、本当に変えようと思ったときには、もっと力が必要だ、もっと本当は自分が成長しないと変えていけない、貢献できないということに気がついて、そのための力をつけたいと思って、内発的な動機をもって、さらに学びに向かっていく、とこういう流れ。中学生、高校生のキャリア教育という、地域・社会とともにある自分の未来を、地域社会の未来とともに描いていく、そんな教育活動がさらに積み上がっていくといような、そういう発達段階の縦の流れというものを視点として持っていくというのが一つあるのかなと。

もう一つが、そうはいいいながら、本当にこれからどんな力を育てていく必要があるのか、どんな人材を育てる必要があるのかということを、やっぱり学校、そして地域総がかりで協議、「熟議」していくという視点だと思います。

これについて私、その10年前に隠岐の海士町のほうで、島前高校へかかわらせていただいていたんですけども、そのときなんかも、まさに教員と地域の方と一緒に議論をさせていただいてきました。そのときあった話をこの後の「熟議」の一つの参考にということとさせていただくと、当時、隠

岐で話していた子どもたちの課題という、主体性とか自立心とか、課題発見、解決していく、こういう力がやっぱりなかなか育っていないと。少子化になっているので、親や教員が全部先回りしてやってあげると、問題がありそうだったら問題解決してあげる、取り除いてあげると。そういうことを目が行き届くがあまりどんどんやっていると、子どもたちが自分たちで問題を何とか解決していこうとか、協力して何とかこれやっていこうとかっていう気持ちだとか力が育ちにくい、そういう状態があったと。学ぶことに対しての意欲も、言われるから素直にやるけども、みずから学んでいこう、学びをとりに行こうという力、意欲だとか、キャリア、自分の進路も、やっぱり親や教員が決めてあげるといことをやってくる中で、自分の進路や生き方を自分で考えていくといような意識だとか発想といものがなかなか育っていない。同じような人間環境の中でやってきてますから、多様な価値観、異なる価値観を持った人たちと一緒に協働していくような力だとか、そういう環境がなかなかないといことなんかを、当時すごい議論の中で問題視していました。また、地域側のニーズとしては、やっぱり後継者だとか地域の担い手が足りていない、不足してる。さまざまな課題がある中で、課題をみずから解決していけるような発想が必要だとか、既存の雇用、産業が衰退に向かっていってると、何とか産業を新しくつくっていく、そういうニーズなんか非常に大きい声として上がっていました。

その中で、これからはこの地域社会の本当につくり手を育てていきたいんだと。そのために必要な力として、当時、当然幾つも上がってきてましたけども、一つとしては地域起業家的精神、これビジネスを起こすとか会社を起こすという意味でなく、みずから事を起こしていくといような力や発想や意識、態度と、次のもう既に今来てるグローバルな時代に向かって、地域のこ

としかわからないとかできないだけでなく、地域に地に足をつけながらも、世界とつながっていける、地球規模での発想を、広い視野を持ちながら、地域の課題解決に取り組んでいける、こういう発想がこれから必要だというようなことが議論されました。そして今までは育った若者たちがみんな地域外に出ていったわけですが、仕事がないから地元には帰れないと言っていた若者、非常に多かったわけですが、今もそうですけど、これから育てたい、これから自分たちが育てていきたい子どもたちや若者の姿は、仕事がないから帰れないではなく、仕事をつくりに帰りたいんだと。この町にいろんな課題がある、それも学んで、知ってる、だからこそ、自分たちが帰ってきて、自分たちでそれを解決していきたい。仕事、雇用の場が少ない、わかってると。だから自分たちが帰ってきて、そういう場を自分たちでつくっていききたいんだ。そういう気概を持った若者たちを育てていきたいというのが、「熟議」の中で生まれてきた共通の願いだったわけですね。そのためにさまざまな取り組みが、この先始まってやっていったんですけども。

その中で一つだけ、教員以外の地域の方たちなんかで、そんな中で自分たちは何ができるのか、そして子どもたちに意識の変化だとか、態度の変化を求めるだけじゃなくて、自分たちの意識や態度も変えていかなきゃいけないんじゃないかというような議論が、起きている。そのときに象徴的だったことを、一つだけ最後紹介すると、今までの自分たちのこの地元や地域やふるさとの対する考え方も変わっていかなくちゃいけないんじゃないかという話です。今までは、ふるさととか地元っていうのは、志を果たして帰ってくるような場所だと。当時、102年前文部省がつくったあの唱歌「故郷」の3番は、「志を果たして、いつの日にか帰らん、ふるさと」へと歌われていたわけですが、この歌でいくと、志を果たす

のはどこかという都だったわけですね。都市、中央、東京、そういう場所で志を果たすんだと。終わったら帰ってくるような場所が、このふるさとだというような考え方で意欲や能力、志ある者を中央に集めた中央集権国家をつくっていったわけですが、これからはそれだけでは成り立たない。これからのこの21世紀の人口減少、そして地方創生とかのこの時代において大切なふるさと観は、志を果たしに帰ってこれる場所。今まで、こういった志やチャレンジするということと、田舎やふるさとというのは結びついてこなかった。チャレンジするんだったら都へ行けと。おまえ、能力がある、チャレンジ精神旺盛、それだったら行ってこいと、みんな送り出してきたけど、それをもうこの発想として変えていこうと。まさに雲南市さんがいわれるチャレンジですね。それを当時、隠岐なんかも話をして、大人たちがやったのは、大体飲み会の最後に「故郷」を歌うと。僕ら、もう何百回も歌いましたけども、飲み会の最後、みんなで手つないだりとか肩組んだりとか、学校の卒業式の最後も「故郷」の歌、そのとき歌う「故郷」の3番は、「志を果たしに、いつの日にか帰らん、ふるさと」へと、みんなで大合唱して歌っていく、そういう自分たちのマインドも変えていくし、そういう思いを、願いを子どもたちにも歌いつないでいきたいということで、地域の方たちとやっていくとか、そんなこともやっていましたということで、すみません、最後余談でしたけども、そんなことで、「熟議」を通して、本当にどういう地域や子どもたちを育てたいのか、そのために自分たちは何ができるのかというのを、これから考えていくということで、ぜひその輪の中にも入らせていただけたらと思っておりますので、よろしくお願いします。

○今村氏　ありがとうございます。

もっともっとお話を伺っていききたいんで

すが、「熟議」を始めるまでにあと20分しかないで、ここであと10分ほどちょっと私から、そしてお互いに聞いてみたいことを聞くという時間に充てたいんですけども。

ちょっと、まず個人的なことを伺いたいですけど、言ってみれば最先端の東京で、たしか岩本さんと私、同級生でして、東京出身のシティーボーイなわけですよ。東京出身のシティーボーイは、最先端の場所で、言ってみればいろんな機会を得ながら育ってきたと思うんですけど、何で今そもそここにいるんですか。完全に。東京の大学生からいっても、就職人気ランキングほぼ1位、ソニーに入社されたはずという記憶が、私の最後の記憶なんですけど、何で今ここにいて、このような仕事されてるんでしょうか。

○岩本氏 そうですね、僕は、10年前、本当たまたま縁があって隠岐の学校で出前授業をということで、出前授業の講師みたいな形で呼んでいただいたのが、初めて人生において島根県に足を踏み入れた第一歩でした。そこから僕の人生は狂って、道を踏み外してしま……。

○今村氏 狂ったって言っちゃいましたね、今ね。狂ってないですね。

○岩本氏 ですけど、そこで痛切に感じたのは、あ、ここに未来があるな、日本の未来はここにあるなと思ったんですよ。当時から言われてました人口減少とか少子高齢化、財政難とか、日本の重要課題と言われて、当然ニュースだ何だで言われてるわけですけども、東京で働いて全くピンとこないわけですね、そういったことに。それが島根に来させていただいたときに、もうリアルに起きてると。日本全体の高齢化率の、本当に20年、30年、今40年近く先まで行っているということで、ここがもう未来の縮図であり、箱庭なんだと。ここがその課題の最先端であり、最前線なんだなとい

うようなことを感じて、そこに一番僕は魅力というか、可能性を感じて、本当にこういう課題とどうちゃんと向き合いながら幸せな地域社会や持続可能な地域社会つくっていくのか、もしくはその中で本当に教育が果たすべき役割って一体何なんだろうかと、教育からこういった次の時代に向けてやれることだとか、その可能性って何なんだろうかと。やっぱりそれを何かつくっていくような感覚があったというか、ここでそれをつくっていけば、それはこの地域や島根県のためだけでなく、きっとほかの多くの地域や、これ日本の未来の教育にもここから、この足元から貢献していけるっていう、そういう妄想があって、それで間違っちゃったみたいな。

○今村氏 いやいや間違っ……正解に至りましたね、本当。言ってみれば、本当に一般的に言う、当時まだ地方に移住とかIターンとかっていう言葉もそんなに聞き覚えがなかったわけですよ。私にしてもNPOを立ち上げるなんて、ちょっと親からするとどこで間違っちゃったんだっていうようなことを言われてましたけど、岩本さんでいうと26のときに島根においでになったっていうことですけど、何となくそういう若者たちの、ないものを自分でつくっていくことが楽しそうっていう感じが何となく見えてきてるのも、逆にいろんな機会を与えられ続けてきた私たちの世代の特徴なのかもしれないと思うんですけど、小山さんから見て、彼みたいなこと、どういうふうに見えてますか。

○小山氏 いや、不思議ですよ。はるか上のおじさん世代、もうバブルをよく知る世代からしてみたら、最近の若い人たちってどうしてこういう行動、おもしろいね、すごいねって思うんですよ。いや、失礼ながら、皆さんこうやって当たり前、今村さんの仕切りで、岩本さんのお話とか聞いてるけど、この二人、全国的にすごい二人

なんです。

○今村氏 いやいや、そんなことはないです。

○小山氏 いや、言っときますけど、言っときますけどって、私ね、だから地方創生の仕事してたんですね、安倍政権できてしばらくして。それで石破茂さんが大臣やられてたんで、仕事の一つで、とにかく石破大臣、現場で活躍してる、地方でフィールドを持って現に活躍してる若い人と話したい。自分はもう国会で日程とられて東京をなかなか出られないもんだから、地元にも思うように帰れないから、できるだけ呼んでほしいみたいなことで、リストをざあっと作るわけですよ。その中に入ってたんですよ、今にして思うと。

私は、それで、電話したら、今村さんはたしかスケジュール全然合わなくて早々に諦めたの。岩本さんはたしか所在がつかめませんかという状態になってて。

はい。つまり、石破大臣も直接話を聞こうとして、何とか手を尽くすようなお二人が、当たり前皆さん、こうやって雲南のここではいて、これから「熟議」に参加しようっていうのは、要するに、本当に最先端はここにあるっていうのは、キャッチフレーズじゃない、実際にそうだというの、皆さん思ってもらいたいですね。

○今村氏 小山さんにしても、ちょっと年が上のおじさんっていう言葉おっしゃって、確かにそうかもなとちょっと思いながらお話ししてるんですけど、すみません。小山さんもたしか30代のときに初めて雲南市においでになったんですね。

○小山氏 30ちょっと前ぐらいですかね。

○今村氏 20代のときですよ。だから、岩本さんが26で島根入り、雲南デビューは29ぐらいなんですかね。

○小山氏 要するに、土江先生と出会いがあったからですね。

○今村氏 そのときに、逆になぜ東京の中心である中央教育審議会を取り仕切る文科

省にいらっしゃる立場ながら、雲南市に何を感じて、ここにおいでになったんですか。もしかしたら、そこには、ここにはあって東京にないものがあつたんじゃないか、それは私がここに引きつけられてる理由でも、岩本さんが引きつけられてる理由でもあると思うんですけど。

○小山氏 いや、ちょっと抽象的な物言いですけど、答えは東京にいても見つからないなと思っていて、答え探しに来たというような感じなんですよ。当時は、平成4、5年ごろ、総合学習をどうするんだ、何だそれっていう話で。

○今村氏 総合学習を、これからつくっていくぞっていうタイミングですね。

○小山氏 ええ。どうやってやるんだといったときに、地域巻き込んで、学校だけじゃなくてやっていかないと、学校教育だけじゃなくて社会教育とも連動していかないと話にならないよねっていう、問題意識だけあって。でもそしたら土江先生から、じゃ、ちょっと地元で議論しようかってことになり、わかりましたって来て、酒飲みながら議論始めて、実は昨晚も同じ調子でやらせていただいたんですけれど、もう25年たつ。

○今村氏 実はそれが「教育フェスタ」のスタートだった。

○小山氏 そうです。「第1回教育フェスタ」です。

○今村氏 日本の総合学習のヒントは、雲南の教育フェスタからヒントを得た可能性もあるということですか。

○小山氏 いや、私がっていう意味じゃなくて、文部科学省の若手が入れかわり立ちかわり25年お邪魔して、ここで議論させてもらって、輪に加えてもらって、遠慮なく膝詰めで本音の議論させてもらって、その問題意識を持ち帰って仕事してるんで、路線が近づいてくるのは、もう理の当然だと思うんですけど。ここで見つけた答え、ここで聞いた問題意識を、引き続き東京に持つ

て帰って、私どもは仕事し続けている、そういう思いですね。

○今村氏 なるほど。ということは、この島根にしかり、特に雲南市には、既にある意味では最先端の日本のこれからをつくるヒントが、既にそこにあるかもしれないということが、お二人のお話からもわかりました。とはいっても、今、アクティブ・ラーニングといわれていますが、もう既にアクティブだよと思われてる方もいらっしゃると思いますし、何がどう変化していくのかということですが、先ほど小山さんがお話しになった、今既存の仕事は35%しか残らない、65%の子たちは、全然今はない仕事を担ってるだろうという、マイケル・オズボーンさん等が話しているような予測とかいろいろとあるわけなんですけど、それを学校はどういうふうに見ていけばいいのかということについて、「熟議」をこれから始めていただく上でどこから話せばいいですかね。

○小山氏 学習指導要領の変遷って昔から教育論争いろいろあって、学力低下問題とか、「ゆとり」とか、皆さん御記憶に新しいかもしれませんが、その前からも、戦後すぐ、体験重視か系統的知識が大事とか論争はあったんですね。1960年ごろ学力低下批判が、当時、経済界中心に起きたりして、カリキュラムの内容を増やしてみた、教育内容の現代化と。でも、なかなか学校現場で先生方に御努力いただいてもこなし切れないよ、落ちこぼれが問題になるよ、校内暴力やいじめを発生してきている時代状況もあって、昭和52年の議論から「ゆとり」という言葉が出ていたわけですね。

これは世間の印象とは大分違うかもしれませんが。負担を減らして、バランスを学校生活にもたらそう。そして何をしてきたか。平成元年の改定でも、社会の変化とか、心豊かとか強調して、1、2年生の生活科が始まった。道徳も強調されたけど、地域素材、地域教育とか盛んに言われ出しました

ね。学校5日制で土曜日何をする。総合学習も始まった、何をする。そして「ゆとり」批判もあって、学力低下があって、ちょっと総合学習の時間減らしたりとか、今、ちょっと苦しい編成が続いて、今も議論になってる。で、アクティブ・ラーニングだと。

一体、先生方にこれだけ頑張ってもらって、忙しい思いしてるのに、学校現場は大変になる一方で、役所は何かこう勝手にキャッチフレーズ、手をかえ品をかえ出してるけども、何だと思われてる先生もいらっしゃるかもしれない。いや、ぜひ考えていただきたいのは、根っこは皆同じでしょ。これから皆さんに議論してもらいたい、さっきのこの「熟議」のテーマで提示してもらったような、この地域なりの皆さんの学校ごとの答えを探してもらえないんだという1点に向いてるように、私は思うんですね。というよりも、この25年教育フェスタの議論に参加させてもらって、そういう確信が強くなってきています。

だから、別にヒントとか正解はもう全国的にはない、何度も申し上げるように。なので、それこそが未来のチャレンジで、チャンスなんだけど、じゃ、高齢化が進んで、人口も少ない中で日々の暮らし、どうやって維持する。仕事をつくるたって、なかなかね。だけど何が仕事になるかわからないので、地元にあるものを一生懸命探して、どういう地域をつくっていくかっていう、大人たちの議論をぜひしてほしい。そうすると、子どもたちに何を教えたいのかっていうのはおのずと見えてきて、それは多分一致してくるんじゃないかなというふうに思っています。

○今村氏 ありがとうございます。

では、ここから「熟議」を始めていただくんですけども、どのようにやるのかということ、ちょっとカタリバの生田から説明をしたいと思います。

○生田氏 失礼します。NPOカタリバの生田です。それでは、この後11時から行います「熟議」に関してご説明をさせていただきます。

「熟議」の約束として、ぜひ皆さんの活発な議論を行っていただければ思っております。ぜひ本日は、立場などを関係なくリラックスした状況で議論のほうを進めていただければ思っております。名称なども○○さんみたいな形で、日ごろ使わない、日ごろは○○先生みたいなことが多いかと思うんですけども、ぜひ○○さんみたいな形でリラックスした議論を行っていただければ思っております。

二つ目なんですけれども、やはり皆さん、それぞれの考えがあるかと思っています。ぜひ、その皆さんのそれぞれの考えを大事にいただければ思っております。違って当たり前かなと思っていますので、そういった違いを受容するような議論の進めをしていただければ思っております。また、日ごろ考えないような発想を、本日は大歓迎したいなと思っております。生徒のことを考えながら議論をしていただくのもいいんですが、本日は日ごろのことをちょっと隅に置いて、本来あるべき姿を議論していただければ思っております。目指す状態としては、本当にオープンで自由な会話を、この後11時からの1時間で行っていただければ思っております。

本日の「熟議」のゴールなんですけども、この後、「熟議」、11時から12時で開催いたしますが、「熟議」が終わりまして、最後に閉会の会があるんですけども、そこでぜひ皆様の意見を共有する場を設けたいなと思っております。つきましては、「熟議」の会場に、それぞれのテーブルに白い画用紙とピンクの画用紙を用意しております。白い画用紙のほうに「育みたい力」を、記入していただければ思っております。また、ピンクの画用紙に関しましては、「その力を育むための具体的な行動」であ

ったり、「挑戦」のほうを書いていただければ思っております。

それでは、一度司会のほうにお戻しさせていただきます。

○今村氏

今、小山さんがお話しになっていたとおり、子どもたちにどんな力を育むのかということが、一番大切です。そこをビジョン、目の前の子どもの課題に頭を悩まされてることかと思うんですけど、一旦、その課題感をヒントにさせていただいて、ただ、そこに縛られずに、これからの社会、移り変わっていく中で、どんな力を育んでいくべきなのかっていうことを白い紙に書いていただくのと同時に、小山さんがお話しになったとおり、その力を育む大人たちがどんな変化をしていくべきなのか、どんな挑戦をしていくべきなのかということをピンクの紙に書いていただくということでお願いいたします。

本日は、4、5人の、中学校区ごとにランダムに、小学校の先生、中学校の先生、それぞれ一緒のグループになっていただくことになるので、日常的には余りかわりがない方とお話しになると思います。同時に、外から今日おいでになっているゲストの方々とか、行政で働かれてる方々が皆さんの「熟議」のサポートをします。ただ、サポートはファシリテーターという形でサポートするケースもあると思うんですけど、メモ程度をとられる形もあるかもしれないので、基本的には先生方、また保護者の方々、地域の方々、それぞれのグループで、もう雑談を、雑談ではないですね、「熟議」を楽しんでいただければと思います。

では、今から会場に移動いただければと思います。

11 時～12 時 「これからの時代を生きていく子どもたちがどんな力を育んでいくべきか」「そのために大人たちがどう変化していくべきか、どんな挑戦を大人たちはしていくべきか」をテーマに「熟議」が行われた。